平成 29 年度「次世代と描く原爆の絵」の取組みについて（報告）

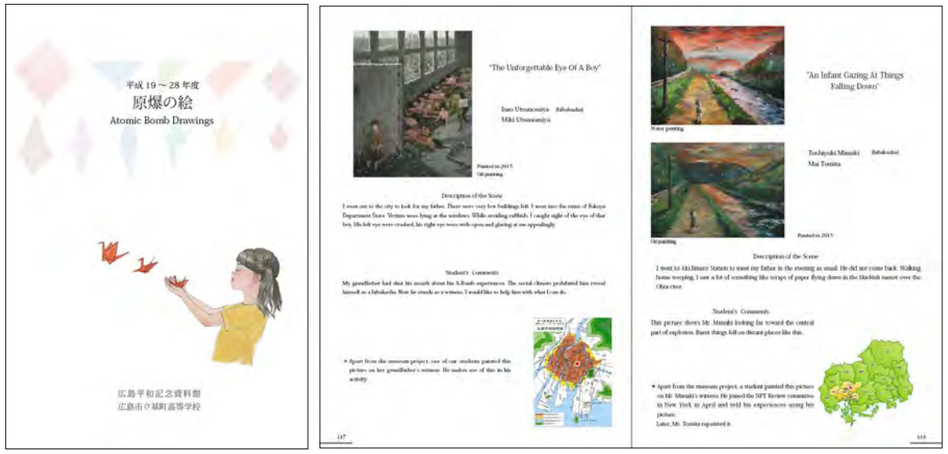
基町高校美術部が取り組む被爆体験証言者の証言を絵にする「原爆の絵」の活動は、昨年、１０年目の節目を迎え、これまでに描いた原爆の絵は１１９点となりました。昨年８月には全ての原爆の絵を展示する展覧会をアステールプラザ（広島市）にて開催しました。お盆時期の土日２日間だけの開催であったにも関わらず、８００名を超える多くの方にご来場いただき、東京、大阪、福岡など遠方からも、この展覧会を見るために来広された方がおられました。多くの方に生徒たちが描いてきた原爆の絵の１０年間の歩み、平和への思いを感じていただけたのではないかと思います。

原爆の絵画展（アステールプラザ）会場風景

原爆の絵画展（ギャラリートーク）
原爆の絵を制作した生徒が、描いた場面についての説明や、制作した思いなどをお話ししました

また、この展覧会に合わせて原爆の絵全作品を掲載した作品集（日本語版、英語版）を制作しました。作品集の制作に当たっては、65 回生（創造表現コース 13 期生）の的場千絵さん（安田女子大学 英文科）と沖田泰弘さん（光風会会員）にキャプションを英訳していただくなど、ご協力いただきました。

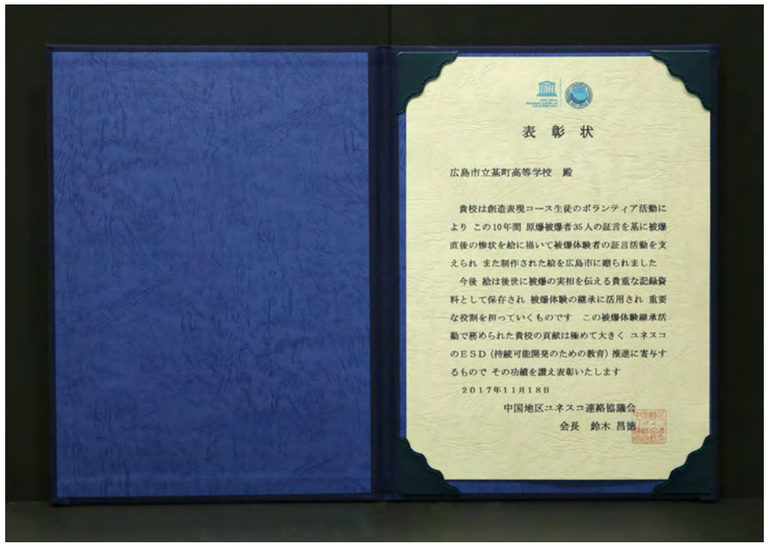
また昨年は、原爆の絵の取組みを１年にわたって取材した報道ステーションのドキュメンタリー、ＮＨＫ広島放送局が制作したヒロシマ８・６ドラマ「ふたりのキャンバス」（主演：小芝風花、近藤正臣 /NHK オンデマンドで視聴できます）とドキュメンタリー、毎日新聞写真特集での掲載（全国）など、全国の方に原爆の絵の取組みを知っていただく機会がありました。若者が被爆体験を次世代へと継承していく取り組みを多くの方に知っていただき、さらなる活動のきっかけとなっていけば幸いです。



原爆の絵作品集

毎日新聞写真特集（2017 年 7 月 29 日掲載）

なお、昨年 11 月には中国地区ユネスコ連絡協議会表彰、12 月には第 4 回広島県ユネスコＥＳＤ大賞 地域ユネスコ（学校）部門大賞を、また、これまでの１０年間の取組みと、全作品を掲載した作品集の制作に対し「平和・協同ジャーナリスト基金賞」奨励賞をいただきました。



中国地区ユネスコ連絡協議会表彰

平和・協同ジャーナリスト基金賞贈呈式（日本記者クラブ）
64 回生富田葵天（そら）さんスピーチ

また、「原爆の絵」の取り組みを取材して東京の青年劇場が制作した「あの夏の絵」（2015年初演）は、各方面から高い評価を得、昨年 11 月の基町高校での学校公演をはじめとして、全国での公演が始まりました。東京での青年劇場スタジオ再演はほぼ満席の盛況であったようです。今年も全国各地で公演される予定です。原爆の絵を描く現代の高校生と被爆者の心情やその変化を分かり易く再現した劇ですので、機会がありましたらご覧いただければ幸いです。

「あの夏の絵」舞台風景

㊤舞台稽古に臨む劇作家の福山啓子さん ㊦被爆者の証言を聞くシーンを稽古する俳優ら＝いずれも東京都多摩市

「原爆の絵」舞台で語る

東京の劇団、きょう基町高で上演

広島市中区の市立基町高校の生徒たちは10年前から、被爆者の体験を絵に描いている。その活動をモデルにした舞台劇「あの夏の絵」が7日、上演を続けてきた東京の劇団「青年劇場」によって初めて同校で披露される。

「人間をいきなり黒で塗るなんてできんよ」

「俺も赤のチューブ取った時、違和感あった。人を赤で塗るんかと思って」

青年劇場の俳優たちが今月2日、東京で舞台稽古に励んでいた。劇は広島市にある高校の美術部の話。平和記念資料館から被爆者の絵を描くよう依頼があり、3人の生徒たちが迷いながら「原爆の絵」に取り組むという筋立てだ。

モデルの基町高では、2007年度から「原爆の絵」の活動を続けている。被爆者の証言を聞き、約1年かけて絵を完成させる。これまで延べ50人以上の証言を絵にしてきた。

卒業生で東京芸術大大学院に通う富田葵天さん(23)は、高2の時に描いた。被爆時に旧制中学1年だった男性が、身動きできなくなった女性に足首をつかまれたのに手を振り払った経験を証言してくれた。富田さんは「絵を描きながら、当時の経験を追体験していくような感覚だった」と振り返る。

青年劇場の劇作家、福山啓子さん(61)は14年、活動を紹介した日本原水爆被害者団体協議会の機関紙を目にした。「被爆者が自ら描いたかと思うほどの圧力を絵から感じました」。15年2月に基町高に足を運び、富田さんら何人かの生徒や卒業生に思いなどを聞いた。

「絵にこれほどの力があるとは考えてもみなかった。体験をいろんな方法で繰り返し語り直していくことが重要だと思う」と話す。

美術部員の一人を演じる長崎市出身の林田悠佑さん(24)は、15年の初演を機に祖父母が被爆者であることを知った。「正直に言って『原爆は興味なし』って思ってました。被爆体験を改めて聞くと、言葉にならない感情がワーッてわき上がってきて」。基町高での公演について「いろんな背景を持った人間が原爆と向き合った時、何を感じるかが伝わればうれしい」と話している。

（久保田有暉）

朝日新聞（2017 年 11 月 7 日掲載）

「あの夏の絵」パンフレット

なお、完成した原爆の絵は、広島平和記念資料館に寄贈され、被爆体験証言者が修学旅行生などに被爆体験を話すときに、当時の状況をより理解してもらうために使われていますが、昨年 12 月より、毎年 8 月と 12 月の 2 期に分けて、原爆の絵の一部を展示する展覧会を広島国際会議場（平和公園内）にて継続的に開催することとなりました。機会がありましたらご覧いただければと思います。

基町高校創造表現コース・美術部は今後も美術を通した平和への取り組みを行ってまいります。ご支援ご協力のほどよろしくお願いいたします。